

俳句雜誌



空

令和2年7月31日発行

第18巻3号

通巻第91号



2020・7

SORA 91号

朽若葉

柴田 佐知子

地球在る間の永遠よ牡丹剪る

血族の細りて螢柱かな

—「俳句」六月・七月号より—

荒灘に立夏の波のゆきわたる

老鶯の声のひろがる灘の紺

捨て船をこぼるる錆や浜おもと

建増しの旅館に迷ふ浴衣かな

声太き男の坐る暑さかな

床の間にもつとも遠き蝮酒

山門を走り出でたる羽抜鶏

地獄絵の炎黒ずむ土用かな

もり上がる木の根を掴み清水汲む

荒行へ向かふ白衣や朽若葉

瀧はじく白き行者となりにけり

瀧行者去りたる瀧の棒立ちに



福岡 高倉 和子

泡吹きて貝焼き上る納税期

折れさうな仔馬の脚や春の雪

げんげ田に座れば山の近くなる

真ん中に母の居る頃春の虹

裏木戸の開け通しなる春祭

恋の猫真昼は胴の伸びきつて

足袋脱ぎてざらつく踵春愁

返事待つ体脈打つさくらの夜

東京 中田 みなみ

緑蔭に庖丁を研ぐ匂ひかな

不忍池を越ゆる鐘の音ところてん

易ひの天幕へ消えサングラス

「かねやす」の碑へ打水のついでかな

風鈴は路地の愛矯隅田川

はや灯す打水どきの柳橋

薄ものの脚のばしゆく柴屋口

花水撫でて最後のクラス会

長崎 荒井 千佐代

村中の鶏が鳴き継ぐ花みかん

螢が闇の階段のぼりをり

チエロケース巫女に預けて茅の輪かな

創世記よりの愛憎青林檎

ハンカチに包み隠せるやうなこと

麻暖簾くぐるや男従へて

簡単服肩甲骨のいきいきと

耶穌名聖ルチアてきばきと毛虫焼く

埼玉 服部 早苗

卒業証書機械仕掛けのごとく受く

何回も土手を滑る子蓬萌ゆ

宙へまつすぐ薄氷の反射光

旅を恋ひ地図に旅する西行忌

流水に乗りし男のもどりけり

春昼を籠もるや書信はかどれる

やはらかに水をくぼませ落椿

黄身しぐれ春ほろほろとくづれけり

北九州 深川淑枝

遠山に雪来て昏む馬の水

駆けてこそ輝く馬身水温む

放たれて鞭知らぬ牛草萌ゆる

牛の仔に飲まするミルク木の芽風

寒の水飲むたびに鶏胸濡らす

日の差して笹鳴きの藪動きたる

斧深くたたみし骸枯蟻螂

裏山に罨置きざりや一の午

広島 戸栗末廣

雉子鳩の声に北窓開きけり

山焼のいよいよ猛る起伏かな

うらららと日にほどけゆく春氷

対岸も土筆摘む声上がりけり

隣席の一つ空きたる余寒かな

農小屋へ行つたり来たり水温む

研磨室出て落椿落椿

どこにでも眠るも力諸葛菜

福岡 角野良生

菰を巻く松の丹田締めあげて

枇杷の花黒潮太く沖にあり

猪の総毛逆立て罨にあり

鶏鳴のながき母音や初明かり

二十六聖人の足より寒の雨しづく

雪降るしづけさ雪積もるしづけさ

福寿草大地目覚めてをりにけり

落椿落つる重さのありにけり



熊本 松田明子

遠州灘申し分なき風日和
潮風にもてあそばれし風
連風の一枚つつに風はらみ
風神を味方に暴れ風合戦
存分に勝ち風空に遊ばす

大野城 森田明成

春めくや秘境脱せし平家谷
熔接の遠目に痛し鳥ぐもり
受験生寝癖の髪の立つてをり
雨に借る軒の短し黄楊の花
海峡に網打つごとし鳥帰る

福岡 山本則男

引鶴や机の上の農曆
望郷の高さに揚がる揚雲雀
連山のうすむらさきや鳥の恋
小綬鶏や堂にともりし燭ひとつ
さへづりの森の力となりにけり

糸島 小林朱夏

鳥鳴くや三寒四温の隙間より
揺り椅子に母は子となり粽食ふ
代掻や客待つ座敷作るごと
巣箱より蛇の全身出で来たり
青桐や敷物のごと犬眠る

粕屋 秋千晴

菜の花や無投票での村長選
蜂の巣を爆弾のごと外したり
ゆつくりと吹けば大きなしやぼん玉
人通る度に風船揺らぎぬる
虹見上げ見知らぬ人と喜びぬ

福岡 秋津令

水音に包まれてゐる桜かな
振袖を重ねるとき桜かな
翅閉ぢて揺れてゐるなり紋白蝶
春の虹入院患者の瞳に映る
住職の声よく通る御開帳

直方 石橋幾代

竹林の洩れ日明き仏生会
早蕨や手籠の蔓の荒結び
用心をしても転びぬ春の泥
羊蹄やみちくさの子に声かくる
雛壇の乱れなきまま三日過ぐ

福岡 あさなが捷

初夏や木洩れ日とどく稚魚の群
水鉄砲とりあげらるるまで撃てり
木下闇少年兵は声挙げず
木下闇ひとり入ればひとり出づ
綿雲の溶けて海月となりにけり

千葉 原 友 子

闇汁に招きて婚の橋渡し
 灯されて黒きつぱりと寒蜩
 手付かずの闇ある暮らし鬼やらひ
 持病無し波稜草の根が真つ赤
 農園に白の爆発花すもも

粕屋 吉 田 菫

ふらここを漕いでも漕いでも父とほし
 交番にげんげんの束届きたり
 うつくしき猫覗き込む雛の間
 謂れある名のみ残りて蒸蝶
 もつれたるままに干からぶ蚯蚓かな

福岡 永 淵 恵 子

年寄りし実行委員雛送り
 二度三度撫でて雛を流しけり
 流れ行く雛に青空あるばかり
 堰に来て右往左往の流し雛
 うつぶせに積みあげ雛のお焚上げ

長崎 坂 口 晴 子

みどり児のあくびの大きさ巣箱の穴
 むつ五郎恋のジャンプを競ひけり
 ダンボールに古着足しやる猫の産
 一年生返事のために手を上ぐる
 てのひらより宇宙ひろぐる草の餅

大阪 井 上 和 子

雨水かな赤き実落つる獣道
 白木蓮に涙の湿りひそみたる
 冴返る粗鋤きの田に電気柵
 下萌の畦に耕運機横たはる
 鶏の銜ふる蚯蚓なほ動く

北九州 河 原 敬 子

美しき殻を猪口とし牡蠣を焼く
 社多き海沿ひの道日脚伸ぶ
 堰落つる音やはらかし柳の芽
 蝌蚪の紐藻屑のごとくゆらぎけり
 如月や海へ明るき道伸びて

長崎 仲 里 奈 央

雛祭子は少女へとなりけり
 春来る貴方と見たきものばかり
 将来の夢五つほど花盛り
 横顔は他人のごとし花の冷
 雑用といふ名の仕事桜薬

北九州 兒 玉 充 代

あらかたの形失せたる春の雲
 春雷や夜の施錠を見届けに
 刻々の山の翳りや花辛夷
 花筵死なぬつもりの人集ふ
 たんぽぽの絮ほうほうと風の向き

須恵 苑 実 耶

東京 山田 正子

玄関で済むことばかり風光る
健啖を競ふがごとき花筵
鳩百羽同じ歩調やあたたかし
昼寝覚動き始むる迄暫し
ソックスを履きたるごとく日焼せり

玻璃越しの芽吹きの雨のうすみどり
父の日を父は忘れたふりをして
海明り菜の花の黄に及びけり
マスクして内弁慶な子となりぬ
くれなゐの水輪広ぐる落椿

福岡 山内 碧

北海道 押田 裕見子

だんだんと寡黙になりぬ探梅行
ほろ酔ひの家路や青白き桜
葉桜や生家に黄ばむ農事新聞
又声をかけられてゐる菊根分
郭公や鋤を担ぎて農夫去る

擦れ違ふ人はモノクロ冬の雨
着ぶくれて人の情に触れてをり
古稀の夢追うてつまづく斑雪坂
雪解けし寺に一茶もあるやうな
境内の土俵一円風光る

長崎 松尾 龍之介

大阪 田岡 千章

我が死ぬる元号の春立ちにけり
風光る海辺の墓地は海を向き
囀や養まばゆき日の高さ
あやとりの指うららかにしなやかに
青き踏むカラスの脚の右ひだり

春隣寿限無諳じ下校の児
ぐいのみ底に紺の輪建国日
冴返るCTスキャンに脳内図
春寒へ湯気を伸ばして中華街
下萌を円座としたり力石

兵庫 えとう 樹里

福岡 三井 所美智子

母の忌や化粧ポーチのさくらがひ
古すぎて新しきかな春コート
海市にはパラレルワールドのわたし
春の月からするするとくもの糸
暮れかぬる湖は光背もつごとし

天井をわが世と走る嫁が君
潮風の通る台地やいかのぼり
触れられし枯蝟螂の微動かな
学生の兄が付き添ふ大試験
泥葱を洗へば白き光かな

